
123話 黒き輝き

吉川明人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

123話 黒き輝き

【Nコード】

N7304L

【作者名】

吉川明人

【あらすじ】

ショートショートです。世界中にエコ商品が行き渡ってしまったため、新しい売り文句を考えないといけなくなった時代。その時代を乗り越えて、新たな地球をになう新しい種族とは。

数年に1度開かれる、各国の経済界のトップしか参加が許されない『世界経済会議』が開かれていた。

「今回も、うまく大衆を乗せましたな」

「まったく。地球や環境に優しいというフレーズは反論の余地がありませんからなあ」

彼らは最近の儲け話を楽しんでいた。

「いやはやCO₂を計測する機器のほとんどが北半球の都心部に設置してあるのだから、数値など増えて当然ですよ」

「研究などしょせん我々からの資金提供のもとでしかできないのだから、CO₂が関係ないなど自分の首を絞める発表などできる者はいないですからな」

「我々スポンサーに寄生しているマスコミに至っては、反対はもとより、反対意見そのものを流せるはずがない」

「それにしても、温暖化の犯人に仕立て上げたCO₂と、オゾン層破壊のフロンガスはまったくの別物であるにもかかわらず、区別できずにいる大衆のなんと多いことか」

「しょせん頭を使わない大衆なんぞ、その程度でしょう。
そうさせたのは、他ならぬ我々ですがね」

爆笑する彼らの笑顔は歪んでいた。

「皆さん。そろそろ本題に移りたいと思います。

「ご存知のようにエコによる消費は飽きっぽい大衆の“興味が薄れたため”限界に達しています。

今後、『環境に優しい』に替わる次世代の消費誘導策と方向性を探らなければなりません。

何か意見や提案のある方はおられませんか？」

代表者が問いかけると、数人が手をあげる。

「今後の経済は中国にシフトするのだから、人民の購買意欲をそそるものでなければ」

「それなら少数の富裕層ではなく、今は下層に位置する圧倒的多数の人民を確保しておけば、今後の経済成長とともに底上げされて、巨大な市場となる」

「そんな戦略など何年も前から始まっている」

「ゴミ砂漠すべてを緑化すれば、市場は倍加するのでは？」

その技術のアフリカをはじめとする各国に広げていけば」

「砂漠の緑化はすでに使い古された企画だ。

そもそも緑化のための技術や金はどこから出すのかね？」

「それこそ新たな環境問題として世界に宣伝すればいい」

「もう大衆はエコに飽きたと言っているだろう。」

そんな二番煎じには誰も飛びつかんよ」

いくら彼らでも、地球規模で行うキャンペーンのアイデアはなかなか思いつかない。

「もつと単純に考えましょうよ」

ある大物が口を開いた。

「大衆なんてのは分かりやすくして自分に都合がよく、大義名分が掲げられれば何も考えずに飛びつきます。

考えさせず、手軽で、楽しめる。

これさえ満たしてやればいいわけですよ」

「それはいったい何かね？」

「大衆がエコに飽きた……つまり節約にうんざりしてるって証拠ですよ。

だったら、次は思い切り贅沢させてやればいい。

とは言え、いきなり高額な商品を買えというわけではありません…

…」

これまで環境は『保護』の名目で甘やかされ続けていた。

今日の環境は、この保護によって地球がわがまま、軟弱になってしまったのだとする。

そこで、ライオンがかわいい我が子を千尋の谷に突き落とすように、また、かわいい子には旅をさせるように、地球を鍛え直さなければならぬ

これを受け、学者やマスコミは、地球の環境を元どりに安定させるには地球を甘やかしてはならないと競って発表し、書き立てた。

多くの人々は学者の論文を信じ、マスコミの言葉を鵜呑みにして、次々開発される『鍛』や『スパルタ』といった新製品を我れ先に買い求めた。

そして環境を悪化させることが地球に良いものと信じて、ひたすら“毒”をたれ流し続けたのだ。

「……こうして人間はその後、50年もたたないうちに、たくさんの生き物を道連れにして絶滅してしまつたのです。

私たちの先祖はそのような厳しい環境の中で耐え忍び、今日の地球において最も進化して文明を築き上げるに至りました。

私たちは人間のおかした間違いの轍を踏むことなく、地球の環境に順応して生きていかなければなりませんし、また、それが出来る種族なのです」

講師の先生の話がやっと終わって、僕は学校を飛び出した。

僕にとって滅んでしまつた生き物なんて興味ない。

環境がどれだけ変わっても適応すればいいだけだし、まして少子化なんてあり得ない。

そんなことより、今日こそは黒々とした羽とたおやかな触覚がステキなあの子に、バイトで稼いだお金で買ったプレゼントをあげて、僕の卵を産んでもらえるようがんばるんだ。

地球はこれからも僕たちゴキ・ブリピエンスによって美しく、油に満ちた世界を築き上げていくんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7304/>

123話 黒き輝き

2010年10月8日23時19分発行